家庭薬の今とこれから

時代を経てもイメージは変わらず、あると安心な家庭薬。でも中には、いつの間にか消えてしまった薬も多い。

「昔は一家に一つ救急箱があり、症状が軽い時はとりあえず家庭薬で様子を見るのが当たり前でした」と話すのは、大阪家庭薬協会専務理事の田中祥介さん。「国ではセルフメディケーション（軽度な体の不調を自分で手当てすること）を進めていますが、今はすぐに病院へ行って処方薬をもらう人が増えているようです」。家庭薬の多くは、昔よりも存在感が薄れていると言う。

「若い人の中には『こんなの勝手に飲んで大丈夫？』と、家庭薬を敬遠する人が多い。効き目を伝えるおじいちゃんおばあちゃん世代が身近にいないんですね」。核家族化も家庭薬離れの背景にあるようだ。

「もっと薬のことを知って、活用してほしい」と田中さん

一方、海外に販路を広げている家庭薬もある。例えば樋屋奇応丸は台湾でテレビCMを展開していて、大人にも飲めることをアピール。正露丸は東南アジアを始め、アメリカやカナダ、中国などに市場を広げ、ホノルルマラソンではスポーツサプリメントとして注目を集めた。

「昔から使われてきたからこその安心感が、ロングセラーの家庭薬にはある」と田中さん。「いざという時の助けになる常備薬として、もっと目を向けていただければ」

家庭薬を手元に置くことで、健康への意識を高めることができる。元気で長生きするためにも、賢く上手に利用したいな。

（読売Life　2021年11月号　掲載）